



# 身近な自然

No. 6  
冬号



## 人里の風景が残る地を訪ねて

### - 珠洲市三崎町での自然観察会 -

「いしかわビオトープ交流会」が主催する今年最後の自然観察会が、11月29日に珠洲市三崎町において開催されました。今回の観察地は金沢から約150kmもの遠方で、雨天であったにもかかわらず、12名の参加があり、人里の風景が残る自然への関心の高さがうかがえました。

自然観察会は、ハクチョウが羽を休める水田、ガン・カモ類の飛来地で有名な雁の池などの渡り

鳥の飛来地や、ほ場整備事業で造成されたビオトープ、水生昆虫豊かな農業用溜池、国の天然記念物にも指定されている須々神社の社叢林を見学しました。参加者は、人との共存の上に成り立つ奥能登の自然を、生態、植物、鳥、水生昆虫、陸生貝類、ビオトープと、それぞれ得意の分野で自然観察を展開し、多くの方と自然観察を行うことの楽しさや大切さを実感した観察会でした。

(関連記事 6ページ)

(草光紀子)





12月12日(金)宇ノ気町の貸別荘‘のんびりいこい村’で忘年会がひらかれました。交流会活動がはじまり3年が経ちますが、今回が初めての忘年会でした。当日はあいにくの天候で厳しい寒さとなりましたが、家の中では深夜まで活発な意見が飛び交いました。

忘年会には9名の方が集いました。開催地がわかりにくい場所で、道に迷ってしまった方もいましたが、全員無事に到着されました。大串龍一先生と事務局の高橋さんの挨拶をはじめに、19時過ぎからはじめることができました。今回新しく入会された中国蘇州ご出身の方も参加され、海外生活の経験を豊富に持ってられる方々から、さまざまな諸外国と日本の異文化の話題で盛り上がりました。



20時を過ぎてやっと本題に入り、本年度に制作した‘身近な自然パンフレット’について高橋さんから意見が求められました。とくに改善点については活発な意見が交わされ、「金沢地域の自然についてはよく紹介されて結構であったが、ビオトープの概念や問題点についてもっと書いても良かったのではないかと。いま残っている自然の紹介だけではなく、ビオトープが表す意味について詳しく述べても良かった。ビオトープが人工的につくられた擬似的な自然環境を表すだけではなく、本来の自然環境を含んでいる概念であることをもっと強調しても良かった。」などの意見や、「交流会としてのビオトープに関する考え方をもっと表明したほうがよいのでは。既存のビオトープを

あげて、それぞれの良くないところや、設計や管理において注意すべきところなどをあげてもよかった。」また、「環境とともにそこに生息する生物について詳しく説明したほうがいい。地形や地域と生物との関係をもっと詳しく説明してもよかった。」などの改善点があげられました。つづいて小中学校で活発におこなわれている学校ビオトープについて、深く関わられている方から、取り組みのなかでのさまざまな苦労について話がありました。「学校ビオトープに取り組む先生の中にも、ビオトープに対しての理解に差がある。ビオトープとは何かと言うこと、自然とは何かと言うことをもっとしっかり伝えていかなければならない。」といった話から、交流会がビオトープという名称を使うことの積極的な意味についても話がおよびました。「これから活発になる自然再生事業にビオトープの概念が入ることが大切。動植物のことを自然再生の考えに入れないと環境復元にならない。ビオトープという言葉をあえて使いたい。」といった意見もだされ、ビオトープについての話が深まっていきました。

ひきつづき制作予定の加賀編、能登編についても話し合われました。

21時を過ぎて一次会を終了しましたが、23時頃まで全員が話し込んでいました。その後自分を含めて数名が帰宅したあと、1時すぎまで話し合いはつづき、そのまま宿泊された方、深夜に帰宅された方もいました。



翌日は貸別荘周辺の自然を、地元ことぶき会の喜多さんに案内していただきました。貸別荘から車2台で出発し、まずこの辺りのミサゴを調べられている白井さんにミサゴの営巣地を教えてくださいました。そのあと林道沿いにある大きなため池を見て、宇ノ気ことぶき会の方々がつくられたビオトープに向かいました。

そこは水田の一角にあり、休耕田を利用してつくられた浅い池のビオトープです。周辺は農薬の使用されていない水田で、池にはきれいな水が流れこんでいます。入り口の看板、棧橋、小屋などは、木や竹を上手く使って作られており、いい雰囲気が出されていました。池にはコウホネ属の一種やノハナショウブなど水生植物がたくさん植えられていました。池の水面を覆うように、寝かされている竹が参加者の目にとまり、意見がだされました。竹を寝かしているのは、池にいるメダカを食べてしまうサギ類が飛来しないようにと対策されているものでした。「アオサギが来ることでザリガニやウシガエルを捕食してくれる。それによってメダカが増えることにもつながる。」と本間さんから意見がありました。この意見には一同なるほどと感心しました。メダカのような小さな生きものはとくに、天敵が多数存在し、さまざまな環境要素と複雑に絡み合っていると思われる。対策を人為的にいくつか入れることで、バランスが偏っていないか、注意が必要であることを教えられます。

ビオトープの観察を終えて、同じことぶき会でメダカの保護に取り組んでいる加中さんのお宅に寄り、メダカがたくさんいる池をみさせていただきました。加中さんに宇ノ気町にはたくさんのため池がある話を伺い、近年そのほとんどにブラックバスがはいったことで、多くのため池の自然が壊され、ブラックバスの池と化している話を聞きました。その後林道沿いにあるいくつかのた



め池をみたあと、最後に上山田貝塚にいき、貸別荘に戻りました。途中の宇ノ気町総合公園にある比較的ひろいため池では、人工的な環境にも関わらず、カルガモ、マガモ、ヨシガモ、オオバン、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ミコアイサなど水鳥が以外とたくさんみられ、町民が野生生物とふれあう良い空間となっていることがうかがえました。（報告：川原奈苗）



- 忘年会の感想ひとこと -

年に何回かこういった交流の場を設けていけたらいいと思います。（喜多久雄）

いろいろな分野の方がはいつておられる会で、これからもまたお互いを結びつけるような場がもたればいいと思います。忘年会の席では、お酒が呑めなかったのが残念です・・・。（源内伸秀）

普段それぞれの活動をされている方々が集まって思い思いに話されるので、話題も尽きることなく楽しいひと時でした。欲を言えば次の世代をになう若者がもう少しいたらよかったかな。（白井伸和）

今回は、料理を担当させていただきました。3時間前から準備をはじめ、なんとか開始に間に合うことができました。鍋は2種類つくったのですが、結局まぜこぜになってしまいました。みなさまにはおいしいと言ってお聞き感謝しています。つぎの忘年会は是非食べる方に専念したいと思います。でも、リクエストがあったら料理したいと思います。（高橋 久）

野外観察での交流とはまたちがって、お鍋や刺身を食べながらの場で、楽しかったです。いろいろな方の経験されている話、考え方をお聞きして、経験したいことフィールドにでて見たいことやりたいこともできました。（川原奈苗）

.....





みなさんは、行政から「環境との調和へ配慮」という言葉を聞いたことはありませんか？

農林水産省では最近「環境との調和に配慮」という言葉を頻繁に使っています。

今回はその経緯をたどりながら、今後県が、どのように取り組んでいくのか、ご紹介いたします。

### 1. 農業農村整備事業と環境

まず、私が関係している事業について簡単に説明いたします。

農水省には農村振興局という部局があります。そこから県、市町村、土地改良区の各組織へとつながるわけですが、ここで共通に関係する事業を「農業農村整備事業」と呼びます。

私たちは通称「NN事業」と呼びますが、少し前までは「土地改良事業」と呼ばれていました。

この事業は文字通り「農業と農村」を整備する事業で、その種類は多岐にわたるのですが、ここでは代表的なものを紹介します。

まず、小さい水田を大区画に整備する「ほ場整備」、農業用水路や排水路などを改良する「かんがい排水」、農産物の輸送が目的の「農道整備」、農地を自然災害から守る「老朽ため池整備」、「地すべり対策」、「海岸保全」、農村地域の下水を処理する「農業集落排水」などが挙げられます。

これらの事業には受益者と呼ばれる農家が出て、事業実施には負担金を支払わなければなりません。

次に「環境」という言葉を使うようになったのは、今から約15年ほど前のことです。

「環境」といってしまっても「生活」、「親水」、「景

観」、「水質」が中心で、「生物」はあまり出てきませんでした。当時は「大型機械による農作業の効率向上が優先」という意識が強く、生物は何処にでもいると考える人が多かったと思います。

しかし、全く生物に配慮しなかったわけではなく、希少種や猛禽類の生息地、野鳥の越冬地などでは、道路ルートの一部変更や、工事の一時的休止などの措置を地域単位で行なってきました。

### 2. 農政の転換

この効率重視の流れを大きく変えたのは、平成11年の「食料・農業・農村基本法」の改正でした。

この法律は昭和36年の「農業基本法」以来の改正で、その第3条に「多面的機能の発揮」というものがあります。

これは農業が持つ多面的機能を重視し、維持保全していこうという意味です。

この「農業の持つ多面的機能」を水田に例えると、地下に浸透する水（地下水涵養）、降雨時には調節池の働き（洪水調節）、気温調節（ヒートアイランド抑止）、良好な景観（保健休養）、そして生物の生息環境などが挙げられます。

もう一つは事業実施の基本となる「土地改良法」の改正です。

この第一条に「全ての土地改良事業の施行にあたっては環境との調和へ配慮しなければならない」という条文があります。

こうした流れを受けて近年、環境保全をテーマにした事業が実施されるようになりました。

県内の例では、金沢市福増・中屋、志賀町末吉、



- 施工直後の板柵排水路（志賀町末吉） -



- 1年後の板柵排水路（志賀町末吉） -



珠洲市粟津などがありますが、いずれも水生生物の生息を中心に配慮した、人工的に造成したピオトープです。

先に述べた地区は、規模としては大きいものですが、それ以外の事業でも水路の一部をコンクリートではなく土水路化や、農業用水の調整池を一部小ピオトープ化するなどの取組みが各地で進められています。

### 3. 現状と課題

では、こうした取組みで生物が保全されていくのかといえは、まだ多くの課題が残ります。

一つ目は「コストと負担」の問題です。

環境に良いからといって、多額な費用がかかるようでは実現困難です。また受益者の負担が増加することになれば、農家の理解は得られません。

次に「効率」です。受益者が求めるのは、価格競争に生き残るための整備です。



- 大区画水田で作業する大型コンバイン（松任市） -

大型機械により農作業効率は大幅に向上しましたが、草刈りなどは相変わらず人の手が主体です。

土水路が多くなれば、草刈のほかに泥上げが労力負担増となります。田んぼの所有者だからといって、農家だけに「生態系保全」をまかせるというのは少々酷な話でもあります。

他には「知識不足」です。生態系に関する知識の不足から、配慮対策が不完全になる場合があるかもしれません。それには専門家の意見を十分聞く必要があります。

### 4. 今後の進むべき方向

現在農水省では、環境に配慮した事業を進めるべく「調査設計の手引き」を策定中です。

これとは別に、県では現在「いしかわほ場整備環境配慮指針」を策定中です。

この指針は、ほ場整備事業を実施するにあたり、環境配慮の進め方を示したものです。策定には、行政・学識経験者に加えて農家・地域住民の代表の方が参加していることが特徴です。

指針では、事業実施前の生物調査や環境点検（ワークショップ）など、現地のケーススタディを踏まえて策定されています。



- 小学生による生物調査（鳥屋町） -

また、次世代を担う子供たちに農村環境の大切さを伝えていくことも重要と考えています。

「いしかわ森と田んぼの学校」では、子供たちに体験学習を通じ、農村環境の保全意識向上を目的に推進しています。

しかし、こうした取り組みは行政や専門家が推進するのではなく、農家・地域住民がお互いの立場を理解し「農村の環境を保全していく」という共通認識を持つことが大切と考えます。

まだ時間が必要とは思いますが、一人一人が今よりも一歩前へ進む努力をしていかなければならないと考えます。

（石川県農林水産部農地企画課 橋本尚之）







珠洲駅前に午前11時に集合、雨模様の中12名参加しました。

草光さんより今日の予定は、白鳥を見る、雁の池、粟津ビオトープ、農業用ため池、須須神社、という順で回るとの説明を受け出発。

車で5分も走ったろうか、道路ぶちから150mくらいの距離に一枚だけ水のはった田がある、そこに65羽のコハクチョウがいた、うち12羽が幼鳥である。歩道の縁に腰掛けた地元の人がいるいる説明してくださり、とても大切にしているんだという優しさが伝わってきました。ただ朝晩工サをやっているという話にちょっと心が引かかった。

次に向かったのが雁の池、丘陵地帯を上り下り、スギ、アテの植林が続く、海岸近くの雑木林に入ると、真っ赤なモミジ、ハゼ、しっとりめぬれ赤茶色に染まるコナラの葉、またアカメガシワなどの紅葉が最高潮の感。やがて右手に広がる田、左手に雁の池、道路は間の土手の上を走っている、大きな池だ、周りを見ても高い山もなく、この池は昔から大切な命の水だったことをうかがわせる。人間の姿を見て池のマガモも逃げ腰である。奥のほうにホシハジロ、ミコアイサの が確認された、雁の池名前どおりなら夜には雁が帰ってくるのかな？

雁の池の裏側へ回ると50ヘクタール以上もある平野部へ。見渡す限り人影はなく、大型コンボ、ブル、ダンプなど10数台が動いている。水路と田の高低差は2m、こんな深い溝ははじめて見た。お米生産工場の建設中です。その脇を通り抜け目的の粟津ビオトープに到着しました。まず目についたのは、水面に雲の合間からのぞく青空と周辺の林がクッキリと逆さに映っている。水が澄んでいるのです。水草も少なく、栄養分が乏しい



のだろう。PHはなんと4.0~4.5だという。このような環境で生物が住めるのだろうか・・・そんな心配はまもなく解消されました。コマツモ

ムシ、葉に包まったトビゲラ、ミズムシ、ヒメゲンゴロウ、イトトンボのヤゴ、ミズギワカメムシなど



専門家の皆さん次から次と発見。生き物のたくましさ改めて感服し、又いろんな虫や植物がこの池の環境を徐々に変えていくのではないかと思いました。一周する頃にはさらに青空も広がり、さわやかな風に乗って、ヒヨドリ、コゲラの声がきこえ、そしてアトリの群れも通過していきました。

次は平野部を横切り反対側のため池へ向かう。途中圃場整備からはずれた谷間に数枚の田があり、そこに2羽のダイサギが来ていたのが印象的でした。やがて着いたため池は水抜き用のコンクリート階段以外は自然のままの護岸である。水の色は緑色で前の池より大型の生き物が目につく。オオタニシ、ヒメモノアラガイ、コミズカマキリ、オオミズスマシ、北陸ヨコエビ、カゲロウ、ギンヤンマのヤゴ、オオイトトンボなど、時間があればまだまだ見つけそう。

・・・昼食後・・・

最終目的地の須須神社へ着いたのが午後3時。国指定の天然記念物スダジイ林がある、倒木更新のあとがそのまま残された鎮守の森です。上を見る人、下をさがす人、宝の山だとつぶやく人、そして竹をたたいて音色の変化を楽しむ人、その音が木霊のように原生林を駆け抜けていく。時々驚きの声に集合と分散を繰り返す。手のひらに載せたゴマ粒くらいのゴマ貝、ちゃんと白い殻を背負っている、「おれもここに生きているんだ！」と言っています。人間の大小の基準も自分勝手なものだという思いがしました。

最後にこの須須神社を見てすこし気持ちが楽になった。それは生きとし生けるものを大切に、自然に感謝するという心がこの地に残っていることを感じたからです。

帰り道、雁の池の上を10羽位のコハクチョウが旋回していました。たぶんここがねぐらなのだろう。(交流会会員 辻村 澄)



# 交流会メンバーの自己紹介コーナー



わが家の池の住人たち 白井伸和

金沢大学の学生として住み始めたのは、金沢大学が角間にキャンパスを移転した最初の年だったから、もう10年くらいになるだろうか。大学に近いということもあって、戸室山のふもとでたまたま見つけた貸バンガローを借り、大学を卒業した後も、そのまま住み続けている。街中での生活と比べると、いろいろと不便な面もあるが、まわりは雑木林や田んぼに囲まれており、里山の様々な動植物が、四季折々に楽しませてくれるので、けっこう気に入っている。

この貸しバンガローの敷地は、ちょっとした日本庭園風のつくりになっていて、その一角に畳2枚分ほど広さの小さな池がしつらえてある。この池は、コンクリート張りで何も植えられていなかったが、水深30センチほどで、底には厚く落葉がたまっていた。大した生き物も住んでいなさそうだったが、それがかえってクロサンショウウオの幼生には好都合だったのだろうか、私が住み始めた頃には毎春10匹前後が繁殖のために訪れていた。大体雄が先に何匹か池に入っていて、雌が現れるのを待ち構えている。雌が産卵のために池に入ると、どうしてわかるのか、雄たちは色めきたち、雌が気に入りそうな場所（大体、水中の細い枯れ枝など）で尻尾を振ってラブコールを送り始める。雌は、雄の方へ近づいていっては、気のないそぶりを見せて、別の雄の方へ行ったりという恋のかけひきを繰り返したあと、気に入った雄（もしくは気に入った産卵場所？）のもとで、産卵を始める。しかし、たいていの場合、お気に入りの雄とロマンチックに事が進むことはなく、産卵が始まると同時にまわりから雄たちが群がるように集まってきて、次々とのかかり、団子状のみくちゃ状態になってしまう。雌は産むというよりは卵囊を搾り出されるという感じで、雄たちはこの卵囊に自分の精子を受精させようとしばらくの間もみあいになる。雌はといえば産卵を終えたらもう用がないから、もまれて息も絶え絶えの状態ですぐの外に放り出されてしまうのである。

クロサンショウウオが来ること以外は、ただの水たまりのような池であったが、その後、近所の池や河北潟などから採ってきた水草をいろいろと

池に植えておいたところ、トンボのヤゴやゲンゴロウ類などの水生昆虫も多くみられるようになり、いつの間にかヤマアカガエル、ニホンアカガエル、ツチガエル、トノサマガエル、モリアオガエルなどのカエル類も入れ替わり訪れるようになり、イモリも住み始めた。いずれも、勝手にやってきては、勝手に住み着いているのである。私も別に餌をやっているわけでもないし、彼らも私になついているわけではないが、毎日のようにやってきてはしばらく座り込んで、何もせずに去ってゆく大きな生き物（私）に、だんだん慣れてくるのか、カエルたちも、近づいても逃げなくなった。モリアオガエルはすぐ近づいても平気で鳴き続けるし、トノサマガエルなど踏んづけそうになっても少し緊張するくらいで、平然としている。そうになると、池の住人たちが少しかわいく思えてくる。ある時、池のそばの石垣に住み着いたシマヘビがたびたび池を泳ぎまわってはしつこくカエルを追い回すので、カエルがかわいそうに思い、つかまえて近くの田んぼに捨ててに行った。すると、近所に住むおじいちゃんが見ていて、後で話をすると、「まあ、ヘビも食わんと生きていかれんさけなあ。」と笑っていた。それももっともだと思い、その後現れたシマヘビについては、居住権を尊重してそっとしてある。

水草を入れたことがきっかけで、生物相は確実に豊かになった。しかし、毎春産卵に訪れていたクロサンショウウオは少しずつ数が減り、最近では全く来なくなってしまった。増えるものがいれば、減るものもある。自然のバランスというのは、なかなか微妙で複雑で難しい。



## 2004 年度通常総会とシンポジウムのお知らせ

2004年度のいしかわビオトープ交流会総会は、里山の自然観察会、シンポジウム「いしかわの身近な自然はどう変わったか」と同日開催として以下の要領で実施いたします。

開催日時 2004年4月4日(日)  
午前10:00より  
開催場所 石川県森林公園(津幡町)及びインフォメーションセンター[わくわく森林ハウス]多目的ホール

### スケジュール

- 10:00 - 12:00 里山の自然観察会  
インフォメーションセンター前集合  
主に森林公園内を探索します。
- 13:00 - 13:45 通常総会
- 14:00 - 16:30 シンポジウム  
「いしかわの身近な自然はどう変わったか」

### 【今回のシンポジウムの目的】

私たちが日常接している身近な自然は、高度経済成長期以降の40年間に急速に変化、消失してきました。自然の移り変わりの時間単位からは劇的な変化ではありませんが、日常の風景の変化としては緩慢であり、日々新しく塗り替えられる記憶の中からは、いつの間にか過去の風景は失われていきます。かつてたしかに存在していた、小川や湧き水、田んぼや雑木林の姿が、私たちの記憶から見えかかっています。

忙しさのなかで、私たちは身近な自然の移り変わりを傍観してきた気がします。しかし本来、身近な自然は、私たちが主体的に生きる場であり、また、私たちが関わりを持つことによって形成されてきた環境です。

このシンポジウムでは、この数十年間で、身近な自然がどのように変わり、何が失われたかを見つめ直し、今後の身近な自然の保全と復元に、どのように取り組んでいったらよいかを考えたいと思います。

パネリストには、県内で自然環境や野生生物を長期間にわたって調査、研究されてきた方々をお招きする予定です(数名に交渉中)。

## 「いしかわ環境フェア2003」の報告

8月30日、31日に「いしかわ環境フェア」が石川県産業展示館で開催されました。「環境にやさしい石川をつくろう」をテーマに、さまざまな企業や団体がPRに集まり、当会も出展させていただきました。

当会では、目的と活動内容を知っていただくために、観察会で撮影した写真などをパネルで紹介しました。そしてパンフレット「大切にしたい身近な自然 - 金沢近郊編 - 」を4枚のパネルを使って大きく展示しました。そのほか簡単なクイズや鳥の羽根、カヤネズミの巣などを展示しました。

身近な自然パンフレットは2日間で約100人の方の手に渡りました。来場された何人もの方に「ビオトープってどういう意味?」と気軽に質問いただいて、ビオトープという概念や交流会の活動についてほんの少しでもお伝えできたのでよかったですと思います。また近くで出展されていた鞍掛山を愛する会の方々とお話しする機会が得られたこと、新しく入会された方がいたことは、環境フェアに出展した大きな成果だったと思います。

会場には、環境に配慮した新しい製品や食品、地域でおこなわれている取り組み、研究報告、子どもたちの作品展示や体験コーナーなどがあり、自由に楽しみながらそれぞれの目的や意義について理解を深めることができます。

慣れない取り組みであり、みなさまには十分にご連絡できませんでしたが、次回からはもっと内容を深めたいと思いますので、みなさまのアイデアをよろしく願いいたします。

(交流会事務局 川原奈苗)

.....  
**「 身 近 な 自 然 」 No. 6 冬 号**



2004年1月25日  
発行所 いしかわビオトープ交流会  
Email:biotopi@hotmail.com  
http://biotop.yupapa.net  
事務局：〒920-0051 金沢市二口町八58  
Tel.076-265-3323 Fax.076-265-3435